

豊かな先見性——祝辞にかえて

商学部長

教授 竹 中 清之助

学長には八十歳を迎えられ、なお御元気に教育事業に専念されている姿には尊敬の念を惜しみません。

十六年前に、大学に就任するに当り学長に始めてお目にかかりました。その時の印象はソフトな感じでした。それ以来、御指導を受けておりますが、その時の印象は今でも変わっていません。オーナー学長などにあり勝な尊大不遜の態度は全く見られません。民主的というよりは、そんないかめしい言葉ではなく、むしろ庶民的にわれわれに接しられています。われわれが、ガヤガヤいつているのを素直に敏感に受取って、事を処理していかれるので、われわれは仕事がやり易くなります。

この辺に学長の「安んじて事をたくす」という考え方が現われていると思います。東洋的な民主主義といったならばよいか草の根民主主義といったらよいか、そういうものを体現されているのが松本学長だと思います。

学長のもう一つの優れた点は鋭い先見性を持っておられることです。

昭和十六年に日本の青年教育の必要を感じられ商業学校を創立されました。その当時は次第に軍国主義が強くなる時期にも拘らず、商業に着目されたのは、やはり慧眼だったといえるでしょう。

明治以来の教育で日本は世界でも最も文盲の少ない国といわれていますが、商業技術、経営技術については十分な普及を見ていなかったといえます。勿論、当時でも一部には優れた人々はいましたが、組織の中で、日常の経営を行うための知識―簿記、珠算、経営―には乏しい人は大多数でした。エリートだけでは、組織を支えてはいけないのは当然です。

学長は、この辺のことを考えて、商業学校の創立となつたのではないかと考えます。

戦後、教育制度が変更になり、短大、四年制大学も容易に作れるようになりました。しかし、学長は直ぐに手をつけられなかった。既に今後の日本の発展を考えて大学創立の構想は早くから持たれていたことと思いますが、慎重に、満を持しておられるのが学長の良いところでしょう。

商業的、経済的文盲をなくすことは、日本の経済発展のためには不可欠のことであり、より高度の知識―会計学、経営学―を身につけた人間がいなければ、経済発展を支え、固めては行けない、そういう人間のための教育こそ新生日本のために必要なことは学長にはよくわかつていたと思います。

しかし、学長は直ぐに動かなかった。学長のもう一つの良さは自主独立を重んじることです。寄付を

集め、スポンサーを作り、銀行から借金すれば、昭和三十年代に入れば直ぐに大学はできたでしょう。だが、学長はそのようなことで大学の自由を妨げられるのを嫌った。コマースベースに乗って有名になり、巨大化することよりは、真に「事をたくせる」人間を少数でも手作りで学長は作りたかったようです。その準備にはなお十年を要しました。

昭和四十一年になって、商業学校を創立した精神の延長線上に短大が創立されました。わずか二年後には高度成長期の日本経済を背景に四年制大学へと発展したわけです。学長の念願された日本経済を実際に支えて行く人間の高度の教育が始められたのです。

学長の先見性は、これにとどまらず、更に新しい時代をキャッチしていました。学長は早くもソフトノミックスといわれる時代について考えられていたようです。まだソフト化という言葉は形になっていませんでしたが、情報処理とサービス化は話題になっていました。学長は昭和四十九年に経営情報学科と貿易・観光学科を設けられました。

これからも、学長は老いてますます盛んという言葉の通り、豊かな先見性を駆使して、大学のためにいくつかの新しいことを加えてくれることでしょう。